

## ケムシのガンバリ

群馬県邑楽郡明和村。たいていの人は知らない地名である。群馬県の穀倉地帯のことであるが、とりわけ有名な訳でもなく大した所でもない。しかし私にとっては忘れられない地名の一つである。

大学生活の大半をアルバイトで過ごした私だったが、その日も参院選の世論調査にこの村を訪れた。無作為に選んだ対象二十軒の戸主の意見をアンケート表に基づいて取材するという簡単なものだったが、なにせただっ広い田園地帯のこと。すぐ隣の家と思っても歩くと二十分もかかりたりして調査を終えるのに丸二日かかりであった。出来高払いにしては高給だと思つて飛びついたが、どうりで話がうますぎた。

二日も掛かって、何もこんなに遠い田舎まで来なくても良かったものをもつても後の祭り。歩きつかれた足をひきずりながら私は二時間に一本しかない帰りのバスを待っていた。折からの太陽はもう西に傾いてはいたが、五月の日足は長く、まだまだ日暮れには時間があつた。

ふと前を見ると、一匹のケムシがアスファルト舗装の道路を渡ろうとしている。黒っぽい大きな毛虫で長い毛がモヘアのセーターのように生えていた。もう既に三分の

一ほどを横断しているものの、残った道のりはまだ四く五メートルはある。幸い田舎の道だから自動車も来ないが、果たして無事に向こう側に辿り着けるかどうか、私の最大の関心事になって来た。毛虫は休もうともせず、先程よりも増して一生懸命に背中を波打たせながら進んでいる。

やがて私の頭の中で、悪魔と天使が喧嘩を始めた。いつか必ず来るであろう自動車が、ケムシ君をつぶしはしないかどうかで、大揉めに揉めているのである。

そして試練は間もなくやって来た。一台の車が近づいて来たのである。悪魔は、ほくそ笑み、天使は泣かんばかりであったが私の目は冷たく一台のカメラとして機能しているのみであった。

前輪が毛虫を真中にして通り過ぎるのを確かに見たが、巻き起こされた風で毛虫は吹き飛ばされコロコロッと転がったようにも思った瞬間すぐに後輪が視界を遮り、やがて車は去って行った。ケムシ君はもう動いていなかった。

悪魔は小踊りし、天使はうなだれた。私の本心はどちらだったのだろうか？ 二日間のアルバイト代はすぐに使ってしまったが、この時の葛藤だけは明和村の地名を見つめる度に思い出す。